

# 教科等横断的な体育の学びに関する実践事例 —世界規模の海洋プラスチックごみ問題に着目して—

鈴木 一成\* 中嶋 悠貴\*\* 尾関 里都\*\*\*

\*保健体育講座 \*\*名古屋市立鶴舞小学校 \*\*\*名古屋市立楠西小学校

## A Study of Physical Education Learning in A Cross Subjects - Focusing on the World-Wide Marine Plastic Problem -

Kazunari SUZUKI, Yutaka NAKAJIMA, Sato OZEKI

*\*Department of Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

*\*\*Tsuruma Elementary School, Nagoya 466-0064, Japan*

*\*\*\*Kusunokinishi Elementary School, Nagoya 462-0007, Japan*

### 要 約

本研究では、「プラごみによる海洋汚染」の対策の一つとして、使い捨てプラスチックの削減に着目した教科等横断的な体育の実践を行い、その実践事例の提示と、そこでの子どもの学びを検討することを目的とした。

教科等横断的な体育の実践事例は、海洋汚染と絶滅危惧種であるウミガメをテーマとして、①国語科の教材文「ウミガメの命をつなぐ」での学習（1時間）、②校外学習としてのESD教育（1時間）、③体育科の表現運動の実践（3時間）の構成で、計5時間扱いとした。これらの実践記録を対象として、体育での子どもたちの学びを検討した。その結果、①「他人事」から「自分事」へ、②感受する力（「送り手<受け手」と「自己内対話で一番近い感情を探ること」）、③溶け込み感覚の3つを検討することができた。

Keywords : 体育 教科等横断 SDGs 海洋汚染

### I はじめに

プラスチックごみによる海洋汚染は地球規模で問題になっており、2019年6月に大阪で開催された20カ国・地域首脳会議（G20サミット）首脳宣言でも削減計画査定が盛り込まれた<sup>1)</sup>。2019年度版「環境・循環型社会・生物多様性白書（環境白書）」にプラスチックごみ問題の章が新設されるなど社会問題として注目が高まっている<sup>2)</sup>。また、こうした世界規模の海洋汚染問題を含め、国際連合は17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標「SDGs（Sustainable Development Goals）」を2030年のアジェンダとして、「スポーツと持続可能な開発」に言及している<sup>3)</sup>。また、日本サッカー協会も対応するSDGsのゴールを挙げた取り組みに着手している<sup>4)</sup>。しかしながら、学校教育における実践、なかでも体育科教育におけるSDGsの実践は見当たらない。一見すると無関係に思われる体育と海洋汚染問題を意図的に関連させる試行的な実践は、平成29年告示となる学習指導要領が目指す「持続可能な社会の創り手」<sup>5)</sup>に資することになると考える。我々が生き抜こうとす

るこれからの社会は、環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な深刻な問題と直面する。そして、その都度、最適な解を探りながら、社会を創造していくことが求められる。ここには、改めて教科指導の可能性を問いながら、教科固有の内容を考えていく絶好の機会があるからである。

そこで、本研究では「プラごみによる海洋汚染」の対策の一つとして使い捨てプラスチックの削減に着目した教科等横断的な体育の実践を行い、その実践事例の提示と、そこでの子どもの学びを検討することを目的とする。

### 2 方法

#### (1) 実践の概要

本実践は、身近なレジ袋から見えてくる海洋汚染をテーマとした教科等横断的な体育の授業実践である。これは、環境学習教材である「ごみ非常事態宣言20周年記念DVD」<sup>6)</sup>に身体表現版として収録されたものである（写真1）。「The World is Blue レジ袋くらいなら～To Save the Sea～」というエコソング（以下、

エコソングとする)を基にした表現運動の授業実践が、多くの市民、学校関係者や事業者等への発信源となり、深刻なプラスチックごみによる海洋汚染問題を伝えていくことを意図したものであり、筆者らが名古屋市環境局ごみ減量推進室、名古屋市環境学習センターと連携して、共同実践した取り組みの一つである。

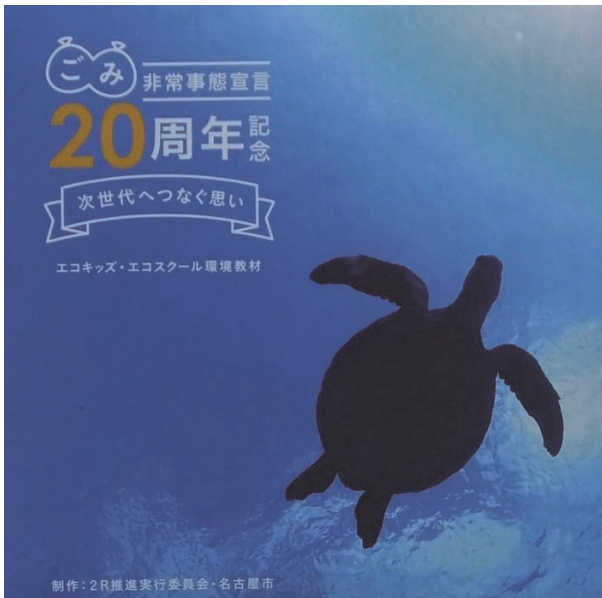


写真1 「ごみ非常事態宣言 20周年記念DVD」<sup>6)</sup>

実践の対象児童は名古屋市立T小学校4年生36名であり、実践期間は平成29年11月28日から12月7日であった。具体的な内容は、海洋汚染と絶滅危惧種であるウミガメをテーマに、①国語科の教材文「ウミガメの命をつなぐ」<sup>7)</sup>での学習(1時間)、②校外学習としてのSDGsの実践(1時間)、③体育科の表現運動の実践(3時間)の構成で、計5時間扱いの教科等横断的な実践であった。

#### ①国語科の実践

2017年11月29日に実践した。教材文を用いて汚染された海や絶滅危惧種となっているウミガメの実態について学習した。ここではウミガメについて知っていることや印象を伝え合い、名古屋港水族館が進めるウミガメについての研究を知る活動を行った。

#### ②名古屋市環境学習センターでの校外学習

2017年12月1日に実践した。名古屋市環境学習センターでの大型スクリーンでエコソングを視聴した。

#### ③体育科の実践

2017年12月4日、6日、7日の3時間扱いの「表現運動」を行った。第1時は「ペアによる対決」、第2時及び第3時は「海洋汚染とウミガメ」を題材とした。いずれも暗幕を閉めた体育館に残地灯とギャラリーからの学芸会用のスポットライトを中央に照らした場作りとした。

#### (2) 資料の収集と検討方法

資料の収集は、本研究が授業の内側からみえる子どもたちの学びを検討対象とするため、関与観察<sup>8)</sup>を採用した。授業者は筆者らが行い、毎時の授業内での子どもの様子や発言、出来事を文章化した実践記録を作成した。その際、学習活動の様子や児童の発言、授業者と児童のやりとりを中心に撮影した映像を適宜見返した。さらに、単元後の子どもたちの感想文から、子どもたちの内的な状況を解釈するための資料を加え、実践記録が「分厚い記述」<sup>9)</sup>になるように努めた。この実践記録から子どもたちの学びを解釈した。なお、子どもの名前はすべて仮名とした。

### 3 実践記録

#### (1) 体育授業前の実践(国語と校外学習)

第1時の国語授業。授業者は「今日は、ある動物のことに考えてもらいます。」と子どもたちに伝え、スーツの胸ポケットから手のひらサイズのカメの縫いぐるみを取り出した。「カメだ」「かわいい」と子どもたちは歓声を上げた。授業者は優しく微笑みながら、ゆっくりとカメのぬいぐるみを泳がせてみせながら、「ウミガメさん。でね、考えてもらいたいのはね、これです。」と子どもたちに伝え、パソコンのマウスをクリックした。すると、黒板のスライドにウミガメの写真が映し出された。するとまた歓声が上がった。「名古屋港にもいる。」「テレビで見たことある。」と口々に子どもたちがそれぞれウミガメについて知っていることを話し始めた。「先生、でもそれで絶滅危惧種でしょ。」と言ったソウタに視線が集まる。授業者は静かにうなずくと、黒板に「ウミガメ」と書き、「今日はね、ウミガメのことを考えながら、教科書の本文を読んでいきます。」と続けた。

子どもたちの表情が一変したのは、34枚のビニール袋が映し出されたときであった(写真2)。



写真2 「オサガメから出てきた34枚のビニール」

これは海に打ち寄せられたオサガメの腹から出てきたものである。「このビニールが1頭のウミガメのお腹の中に34枚出てきました。」と授業者が子どもに話すと、子どもたちは息を止め、教室が静まり返った。「ひどいよ。」と切り出したのはソウタだ。「ひどいってどういうことですか。」と授業者が尋ねると、「人間…」という声が聞こえる。すかさず、授業者は「そうか…でも、みんな人間だよ。」と切り返

した。またも沈黙を破ったのはソウタだった。「人間だけど、動物のことも考えず自分のことだけ考えて海に捨てる人もいるから。」と言ったソウタは怒っているように見えた。この日の子どもたちの国語の授業プリントには、「ウミガメがかわいそう。」「ひどすぎる。」「ウソでしょう!?!」「どうして海にごみを捨てるのか。」「自分がカメだったらどうなるかを考えてほしい。」都いった感想が書かれていた。

第2時の校外学習。名古屋市環境学習センターにて大型スクリーンでエコソングを視聴した。子どもたちは、生まれたばかりのウミガメの赤ちゃんが海へ向かう場面で微笑んだり、34枚のビニール袋の映像で国語の時間を想起したりしていた様子であった。

## (2) 体育の表現運動

### ①第1時

体育の第1時では、「対決!」という題材でエアボクシングや戦いごっこを行った(写真3)。しばらく活動をした後、授業者は子どもたちに「一番の『やられチャンピオン』は誰かな。」と投げかけた。そして、「スタート!」と授業者が再開の合図とした途端、子どもたちは再びエアボクシングの活動に入った。子どもたちは膝をついたり倒れ込んだりして今までよりも大きくパンチを受けるようになっていった。子どもたちはいかにやられるかを楽しんでいるようだった。



写真3 「対決!」の様子

### ②第2時

第2時は、第1時と同じくペアで対決する場面から始まった。「プロのボクサーのパンチをおなかにくらうってどれくらい痛いかな。」と授業者が子どもたちに尋ねると、子どもたちがそれぞれにつぶやいた。「死ぬくらい痛いの。」の授業者の問いに子どもたちはうなずいた。さらに授業者は「そういう痛み感じたことあるかな。」と続けた。子どもたちは少し考えて「ない。」と答えた。「じゃあ、死ぬくらいじゃなくても、みんなが今までの人生の中で一番痛い思い出があるかな。」と授業者は子どもたちに尋ねた。子どもたちは口々に「あります。」と答え、頭打った時、骨折した時、電車に挟まった時などを発表したり、一生懸命に思い出そうとする様子も見られたりした。

「骨折」とつぶやくアヤコに授業者は「骨折したことあるのか。どれくらい痛かったのかな。」と尋ね

た。「死にそうなくらい痛かった。」とアヤコが答える。「じゃあ今から、みんなスローモーションでやるから、プロボクサーのパンチをくらった時の痛みを、一番経験したことのある痛みを思い出して、やってみよう。さあ構えて。」と授業者が合図して、子どもたちが一斉にペアと向かい合い準備をした。授業者の「始め!」の合図で一斉に、エアボクシングが再開した。子どもたちの動きは今までよりも大きくなり、顔を歪ませていた。うめき声まで聞こえた。「大丈夫? 本当に痛いみたい!」と横たわったナナミに駆け寄るのはミクだ。ナナミの肩を持って一緒に立ち上がる。リュウセイはおなかを抑えて顔をゆがめ、うめいて床を転がっている。倒れたソウタは気を失って動かない様子だった。「よし、OK。みんな集まって。」と授業者は子どもたちを集めたが、なかなか起き上がらない子どもたちへは「大丈夫?」と心配な声も上がった。そのくらい迫真の演技であった。

次に、「〇〇鉄砲で対決」を行った。それぞれが武器を持ち、互いを攻撃し合う「ごっこ遊び」である。授業者の「発射!」の合図で攻撃が始まった。あちこちで「何の銃だったと思う?」という声が聞こえてくる。尋ねているのは撃った側ではなく撃たれた側だ。答え合わせをして、「やっぱり!」とガッツポーズするのはソウタだ。ペアのダイキもうれしそうだ。伝えたいという思いからか、子どもたちの動きはどんどん良くなっているように思えた。ショウジは「〇〇鉄砲」の答えがわからずに悩んでいる。おなかをくの字に曲げて「空気鉄砲」と得意げに言うタロウに悔しさを隠しきれない様子だった。やられてはやり返す。その打ち合いは、相手が倒れ込むことで、そのひと流れの動きが完結する。するとすぐにまた別のシーンへの移り変わり、すかさず打ち合いが始まる。最初はペアなのだが、すれ違う別のペアを撃つと倒れ込む様子もあり、一瞬ペアが解体され、偶然にもそこに集まり、すれ違う者同士の即興的な打ち合いも始まり、また通常のペアに戻る。ペアでありながらペアでの対決ではなく、ペアの対決でないようにみえてまたペアの対決に戻る、そんな流動的なペアでの活動がしばらく続いた。

授業の後半は、この「痛み」の学習を踏まえて、子どもたちが親ガメとなり、卵を産む場面へとつながっていった。授業者は「じゃあさ、生むときに、卵のような大きいものや固いものがおなかから出てくるのってどれくらい痛いんだろうね。」と投げかけた後、「じゃあみんな、産んで!卵を産んで!」と授業者が合図すると、子どもたちは思い思いの産卵に入った。「うーん」とうなり出したのはショウヘイだった。おなかを抑え、息を切らして何度も寝返りを打っている。歯を食いしばり、必死で痛みを耐える表情や姿には、実際に卵を産んだことがあるかのような臨場感と凄みがあった。子どもたちは本当にウミガメになって卵を産んでいるかのようなようだった。

胸の前で両手をぎゅっと握り、おなかを曲げ伸ばして苦しみに耐えているのはリョウタだ。「あ〜」と声を上げ、痛みと戦っている。授業者はリョウタの姿を見て、子どもたちをリョウタの周りに集めた。リョ



ウタがみんなの前で産卵の場面を表現すると、その勢いに笑いが起こった。「でもすごい！」と声を上げ、目を見開いたのはソウタだった。そう言ったあと、ソウタは歯を食いしばり表情をゆがめた。「よくわかる。」「すごいよ！」と子どもたちはリョウタを見る。「がんばれリョウタ。」とソウタがリョウタに声を掛けた。ソウタの言葉を聞いた授業者は「じゃあ親のリョウタを応援してあげよう。さあ、がんばれ！」と言うと、子どもたちは肘や手のひらを床について前かがみになったり、手をたたいたりして「がんばれ！」とリョウタに向かって叫んだ。体育館に子どもたちの声が響く。リョウタは体をよじらせ、足をばたつかせて必死に痛みを耐えている。しばらくして、リョウタの動きがぱたりと止まった。「あ！笑顔！」と誰かが言う。「生まれた！」とソウタが嬉しそうに笑って言う。「生まれた？おめでとう、拍手！」と授業者の拍手に子どもたちも続いた。子どもたちがリョウタに拍手を送る。ソウタは拍手しながらリョウタの耳元で何かささやいている。確かに何かを乗り越えたような達成感があつたようだ。

そして、今度は授業者が場面を伝えたわけでもなく、次々に子どもたちが赤ちゃんのカメになった。スポットライトの光の方向へ全員が這って歩き出した。まるで海を目指す赤ちゃんのウミガメのようであった(写真4)。バックミュージックにはエコソングがかかっていた。そして体育館の壁から壁まで最初にたどり着いたソウタが悠々と泳ぎ始めると、続々と泳ぎ始めた。最初はそれぞれの方向で泳ぐ表現をしていたが、いつしか大きな一つの円ができあがり、ゆっくりとしっかりと泳ぐ表現はまさにウミガメそのものようであった。



写真4 「ウミガメの赤ちゃん」の様子

子どもたちは体育館に通じる会議室で第2時の終わりを迎えた。授業者は「明日の体育の時間にね、また環境局の人が来て、みんながこうやって表現するところをビデオで撮りたいそうです。はじめに先生この話を受けたときは、大丈夫かなって思っていたの。」と授業者が伝えると、シュウトが「大丈夫。」とつぶやいてうなずいた。「先生もね、今シュウト君が大丈夫って言ってくれたように、みんなって日本一、世界一、ウミガメの気持ちがわかると思うから、堂々と環境局の人にみんなの表現を見せよう。大丈夫だよ。ね。」授業者がもう一度シュウトたちに確認すると、シュウトたちは小さくうなずいた。

### ③第3時

第3時の1時間前にすでに4名の環境局の方々

体育館へ撮影用の機材を運び、設置していた。体育館に通じる会議室には子どもたちはすでに座ってチャイムを待っていた。授業者がしゃがんで子どもたちに語りかけた。「いつも言っているよね。100点じゃなくて、100%を出し切ろうって。さあ、海が広がりますので、まずはここから遠州灘を出発して、30年分、気持ちよく泳ぎに行こうか。」と授業者が子どもたちに語りかけ、子どもたちは体育館へ通じる会議室をと飛び出していった。第3時の始まりだった。

しばらく悠々と子どもたちはウミガメになり、気持ちよく泳ぐ表現を続けていた。静かに流れていたエコソングが突如止まった。ストップをかけたのは授業者だった。その表情は先ほどまでの穏やかな表情とは一転して、厳しくそして悲しい表情のように見えた。そして、授業者は準備してあったビニール袋をばらまき始めた。子どもたちはそのビニール袋に即座に反応した。うれしそうに、楽しそうにビニール袋と戯れていた。それはまるで、ウミガメが好物のクラゲと間違えてビニール袋を食べようとしていた姿のようであった(写真5)。



写真5 「クラゲと間違えるウミガメ」の様子

「本当にウミガメの気持ちがわかっているの。」と少し強い口調で授業者は子どもたちに問いかけた。先ほどまでの騒がしさが静けさに一変した。子どもたちは黙って倒れたまま動かない。「いいか？ウミガメが今もビニール袋を食べているかもしれないぞ。」「いいか、みんなもう一度立ち上がってごらん。」授業者に促された子どもたちは静かに立ち上がった。「このビニール袋は人間にとってはとても便利なものだ。でも、海に捨てられたらきつと、ごみになる。ウミガメにとってはクラゲだ。そうだよ。嬉しいよね。でも、…食べて…飲み込んだ瞬間…どうなるんだろう」授業者は子どもたちに問いかけた。「死んじゃう。」と子どもたちがつぶやく。「死んじゃうよね。」授業者が続けると、「苦しい。」という声が聞こえた。「苦しいか。息が止まるか。」と授業者は続けた。そして、「さあ、ごみを捨てよう。行け！」と授業者が言うと、子どもたちは持っていたビニール袋を高くに投げた。落ちてきたビニール袋を嬉しそうに捕まえる。楽しげな声が体育館に響いた。そして、ビニール袋を手にした子どもたちは順番に倒れていった。楽しげな声がうめき声に変わっていった。泣き声も聞こえてくる。アヤコはビニール袋を食べるようにしてか

ら、ぎゅっと胸の前でビニール袋を握った。子どもたちが全員横たわった。体育館にはビニール袋が散らばっている。

授業者は「では、30年後もこれでいいのかな。」と子どもたちに尋ねた。子どもたちが「ダメ。」と口をそろえた。「ウミガメがいなくなっちゃう。」とユイがつぶやく。「やだ。」の声も聞こえた。その小さな声が聞こえるほど、体育館はとても静かだった。

その後、子どもたちは体育館のスクリーンでエコソングの映像を視聴した。名古屋市環境学習センターで見たのと同じものであった。子どもたちは皆じっとスクリーンを見つめた。名古屋市環境学習センターの時とは子どもたちの顔つきが違って見えた。あの時よりずっと真剣な表情だった。ジュンペイもスクリーンから目を離さなかった。映像が終わった後、国語で書いた子どもたちの感想文が映し出された。子どもたちは静かに黙読した。しばらく、子どもたちはスクリーンを見つめたままだった。

「じゃあみんな、そのまま後ろを振り返ってみてくれるかな。」と授業者が子どもたちに語り掛けた。その振り返った先には、たくさんのビニール袋が散らばっていた。「この海をどう思うかな。」と授業者が問いかけた。子どもたちは「汚い。」「掃除したい。」「と続いた。「そうか。じゃあこの海のビニール袋、どうしたいか、声じゃなくてからだで、表現してみよう。」と授業者が言い終わらないうちに、すでに何人か立ち上がって走り出していた。子どもたちはすごい勢いでゴミ袋に向かって走っていった。ジュンペイもみんなの後に続いて立ち上がり、ゴミ袋に向かっていった。ビニール袋は授業者の足元に山のように集められ、その周りに人だかりができた。そして、体育の授業を終え、体育館を出て会議室に戻っていった。

授業者は子どもたちに優しく語りかけていた。「みんなやってみてどうだった?」と。子どもたちは「悲しかったし、楽しかったし。海にごみを捨てるひとはひどい。」とリョウタが言った。「…やだった。」とショウマが答える。「なんか、あの…」と口を開いたのはソウタだった。「なんで海にごみを捨てるのか僕はわからない。めんどくさいからって自分の用事だけを考えている。」ソウタの目は真剣で、怒っているように見えた。「いやだった。」とタロウも言う。「何がいやだったのかな。」と授業者が問うと、タロウは小さく何かつぶやいた。「でもそれが人間のやっていることだもんね。」と授業者が続けると「恥ずかしい。」という声も聞こえた。子どもたちの真っ直ぐな意見が心に突き刺さるような感覚だった。「恥ずかしいか。うん。あのね、先生はね、先生は1人の教師として、みんなの力を信じてたんだ。今日あの、朝ね、話したけど、30年後、社会を変えるのは、先生たちじゃないんだ。みんななんだよ。ね。みんな、40歳くらいになったときに、社会を変えられるのは先生たちじゃない。環境局の今いる人じゃない。みんななんだよ。それをね、ぜひね、心にとめて、先生ももち

ろんやれることはやるけど、みんなが、この社会を変えてほしいな。それが先生の最後のメッセージです。」と授業者は子どもたちの目を見て、うなずきながら子どもたちに伝えた。子どもたちもまっすぐにそのメッセージを受け止めていた。静かに、じっと話を聞いていた。

体育第3時終了時の子どもたちの自由記述には、「ウミガメと、きれいな海、そしていろいろな命を守りたい。」「地球にいる動物が、たのしくあんぜんにくらせるように、ダメなことをしている人がいたらとめて、ゴミをちゃんと捨て、動物に害のない世界にしてほしい。」「海にいてゴミを捨てようとしている人がいたら止めたい。」「これからはマイバックなどを持ち歩くようにします。」「今生き残っている、ウミガメを、大切にしたい」「海ガメのたまごをうむときがすごくたいへんだったしぼくたちはきせきでうまれて『みんな同じ生きものだなあ』と思いました。」などと書かれていた。

#### 4 実践事例の検討

(1) 「他人事」から「自分事」へ

国語の学習では教材文の言葉と写真、名古屋市環境学習センターでの学習では大型スクリーンでのエコソングの視聴から、子どもたちはウミガメに関する知識を得ていったといえる。

その過程での子どもたちの言葉に着目すると、例えば第1時の国語では、ウミガメのことをソウタは「それ」という代名詞を使っていた。ウミガメを示す「それ」は、対象が自分と切り離された他者であり、自分事ではなく、他人事を示しているといえる。つまり、体育の表現運動の授業前には、ソウタとウミガメとの間には距離があり、ウミガメはソウタにとって「それ」と呼ぶほどの存在であったといえる。

しかし、ソウタは体育第3時終了後のプリントに興味深い感想を残している。「ウミガメのたまごをうむときがすごくたいへんだったしぼくたちはきせきでうまれて『みんな同じ生きものだなあ』と思いました。」である。ウミガメを示す言葉は「それ」ではなく、「ぼくたち」や「同じ生きもの」という言葉に代わっている。このことから、ソウタとウミガメの距離が多少なりとも縮まり、本実践においてソウタにとってウミガメが近い存在になったことが解釈できる。

さらに着目したい感想文がある。それが単元後の感想文にある「ウミガメのたまごをうむときすごくたいへんだった」である。小学校体育における表現運動のねらいに「なりきって踊る」<sup>10)</sup>とある。しかし、ソウタは「なりきる」ではなく、「なる」という言葉が適当であると考えられる。つまり、ウミガメの形や動きを頭で考えて、それを忠実に演じよう、真似しよう、とする構えも意識もなく、ただ、ただ、たまごをうむことに専念した、ウミガメに「なる」というのが、ソウタの学びの姿に近いと考える。本授業では、ウミガメの身になって感じることによって、「他人事」ではな

く「自分事」としてとらえることができる、そんな力を育てていたのではないかと考える。

## (2) 感受する力

こうしたソウタを始めとする子どもたちの学びを実現できたのは、第1時と第2時の表現運動で培った感受する力が支えていたと考える。それは「送り手<受け手」の指導と、自己内対話で一番近い感情を探る学習経験の二つに分けることができると考える。

### ①「送り手<受け手」

通常、「表現運動は表現すること」ととらえ、「受け手」よりも「送り手」に着目しがちである。しかしながら、本実践での表現運動においては、第1時と第2時の「対決!」という題材では、発信されたものほどのように受け取られたかによって決まり、主導権は発信者にはなく受信者にあるといえる。特に、第2時ナナミに駆け寄るミクも、ダイキやショウジの様子は「送り手<受け手」に力点を置いた学習指導の成果とといえる。またその関係性はペアであることでより鮮明になっていた。例えば、先の写真1は、2人1組の「対決」という活動であったが、スローモーションで互いに攻防する「たたかいごっこ」の場面において、相手のパンチやキックの強さは、「送り手」だけで決まるのではなく、むしろ、「受け手」がどれだけ顔をしかめたのか、どのような倒れ方をするのかによって決まると考える。こうした学びには、子どもたちが互いの呼応する動きの中で、体での非言語メッセージを感受することが十分に耕されていたと考える。

### ②自己内対話で一番近い感情を探ること

第2時では、「痛い」を表現したいとき、どうするかを考える一つの手がかりを授業者が提示していた。それが「自分が一番経験した痛いときのことを思い出す」というアプローチがある。「痛い」ということはどういうことなのかを知るには、自分自身の体と対話がある。本実践では、アヤコの「骨折したとき」や「電車のドアに挟まったとき」があった。そのときのことを思い出して、「声が出なかった」や「息ができなかった」と子どもたちは発表し、その時の自分の体がどうなったのかを探っていたと考える。そのときの感じのままに動くこと（動けないこと）が、「痛み」を表現することになっていたと考える。感受することは、自らの経験を足場にするすることで、身を以て知ることになっていたと考える。鈴木は体育の「知る」には「身を以て知る・相手の身になる」を上げている<sup>11)</sup>。ビニール袋をクラゲと間違えて飲み込んでしまったとき、子どもたちは、自己内対話にて、一番近い感情を探ることで、身を以て知り、さらにそのことで相手の身になることを実現していったと考える。それは、現実には、人間がウミガメの身にはなれないが、表現運動がそれを可能にしてくれるといえる。ここにも、他人事ではなく自分事として環境問題を考える素地をつくる学びがあると考える。

## (3) 溶け込み感覚

本体育実践は真っ暗にした体育館で、ギャラリーから学芸会用のスポットライトを中央の床に当てた「光と陰」のシンプルな場づくりであり、子どもたちのイメージの世界を次々に創り出していったといえる。

例えば、「疲れる」と言いながら、ウミガメの赤ちゃんのときは懸命に海を目指し、海にたどりつくと、先ほどまで砂浜だったのが、海の中へと早変わりであった。場面の移り変わり、時の流れを自由自在、変幻自在に場も合わせていったようであった。シンプルな場づくりだからこそ、実現できた工夫といえる。そして、視界に時々差し込む光は眩しく、一方で自分の影もまた神秘的な感覚にもなり、魔法がかかったような異空間は、表現したくなる場づくりに最適だったといえる。

そして、この場作りは、溶け込む感覚を演出していたといえる。例えば、第2時の「〇〇鉄砲の対決」では、「最初はペアなのだが、すれ違う別のペアを撃つと倒れ込む様子もあり、一瞬ペアが解体され、偶然にもそこに集り、すれ違う者同士の即興的な打ち合いも始まり、また通常のペアに戻る。ペアでありながらペアでの対決ではなく、ペアの対決でないようにみえてまたペアの対決に戻る、そんな流動的なペアでの活動がしばらく続いた」ことがある。また、産卵するリョウウタに声援を送る姿や、ウミガメの赤ちゃんとなった子どもたちが海にたどり着き、悠々を泳ぎ始めると

「最初はそれぞれの方向で泳ぐ表現をしていたが、いつしか大きな一つの円ができあがり、ゆっくりとしっかりと泳ぐ表現はまさにウミガメそのものようであった」こともあった。松田は「『我々』という感覚として、個であることの意識が溶解し、自他の区別が消失したようなある種の特殊な『溶け込み』感覚と、しかしながら自身においては『覚醒』しているという両立の中に、いわば『気分』を共有する特殊な状態がスポーツの中には現れる」と述べ、続けて、「『アイ・コンタクト』と例えられるように、心が解け合って糸を引くような動きの中に、パスをもらったり絶妙のコンビネーションでプレーできたりしてしまう、他者との同調体験である」として、これを「相互同調関係」と呼んでいる<sup>12)</sup>。子どもたちにとっての他者とはウミガメであり、一緒に学ぶ仲間を示す。その他者に対して子どもたちは「『我々』という感覚として、個であることの意識が溶解し、自他の区別が消失したようなある種の特殊な『溶け込み』感覚」があったと考える。

## 5 おわりに

本研究では、「プラごみによる海洋汚染」の対策の一つとして、使い捨てプラスチックの削減に着目した教科等横断的な体育の実践を行い、その実践事例の提示と、そこでの子どもの学びを検討することを目的とした。検討の結果、①「他人事」から「自分事」へ、②感受する力（「送り手<受け手」と「自己内対話で一番近い感情を探ること」）、溶け込み感覚の3つを検討することができた。しかしながら、検討の方法については議論の余地が残る。それでも、海洋汚染という世界規模の社会問題にも関心を寄せ、体育科教育の貢献できる糸口を常に探っていきたい。

謝辞

名古屋市環境局ごみ減量部減量推進室長の小木原吏

香様はじめ同局職員の皆様，元名古屋市環境局環境活動推進課環境学習センター調査員の長屋保夫様に感謝申し上げます。

#### 引用参考文献

- 1) 外務省経済局政策課G20 サミット事務局 (2019) 2019年G20大阪サミット概要. [https://www.kantei.go.jp/singi/g20osaka\\_summit/dai1/siryoushou2.pdf](https://www.kantei.go.jp/singi/g20osaka_summit/dai1/siryoushou2.pdf) (2019年11月30日確認)
- 2) 環境省 (2019) 令和元年版 環境白書・循環社会生物多様性環境白書・循環社会生物多様性環境白書・循環社会生物多様性. <https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/gaiyou09.pdf> (2019年11月30日確認)
- 3) 国際連合広告センター. [https://www.unicef.org/activities/economic\\_social\\_development/sustainable\\_development/2030agenda/](https://www.unicef.org/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/) (2019年11月30日確認)
- 4) 日本サッカー協会 [https://www.jfa.jp/social\\_action\\_programme/football\\_contribution/](https://www.jfa.jp/social_action_programme/football_contribution/) (2019年11月30日確認)
- 5) 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領. 東洋館出版社.p15.
- 6) 名古屋市環境局ごみ減量部減量推進室・2R推進実行委員会事務局 (2018) ごみ非常事態宣言 20周年を記念して制作した環境教材 DVD.
- 7) ひろがる言葉 小学国語4下.pp46-65.
- 8) 鯨岡峻 (2005) エピソード記述, 東京大学出版会
- 9) ウヴェ・フリック (2011) 新版質的研究入門, 春秋社
- 10) 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成29年度告示) 解説体育編, 東洋館出版社.p32.
- 11) 鈴木一成 (2017) 運動・スポーツの「知る」とは? 体育科教育第65巻第11号, 大修館書店, pp36-38.
- 12) 松田恵示, 「遊び」から考える体育の学習指導, 創文企画, 2016, p198